

# 徹底した凝視、生をも描写

早川俊二展

見ることの不思議、そして人の不思議をしみじみ思う。川俊二の作品は、決して大で、そういう絵をつくる画。仕事に出合った。画家、早。きくはない。今回の個展に



「Clemenceの肖像・I」

は十六点を並べているが、四十号が最大で、大半が十号以下である。しかし、その画面から響いてくるものは、絵の大小を超えて、深々とした余韻を保ちながら力強い。不思議の秘密のひとつは、マチエールにある。何か、ルネサンス期のフレスコ画のような絵肌が分厚くつくられた上に、油彩が施されている。

女性を描いた人物画が六。点。細やかなタッチの丹念な積み重ねが生んだ画面は、あやしい生気を潜ませている。確かなデッサン力に裏打ちされた造形である。ほかに、使い込んで少し錆(さ)びのきた油差しや工具が描いてある。古ぼ

「すずめ」



「すずめ」という作品が掛かっていた。一羽のスズメが大地に立っている。『抜け雀』という噺(はなし)を思い出した。五代目の古今亭志ん生が得意にしていた噺で、浪々の画家が宿賃のカタについでに描いたスズメが、画面を抜け出して出たり入ったりするという、いかにも落語らしい設定だった。

けてはいるが人の手に長くなじんで働いてきたものの質感までが、徹底した凝視の果ての描写でとらえられている。あとはカリンやリソグなどのくだもの、茶わんと貝を描いた静物……。画廊の入り口のところに

たのだ。早川のスズメも、なにかそんな予感をほらんでいるように思う。ひとつの命をみつめ、筆端にそれを語らせる力があるということである。

一九五〇年生まれこの画家は、東京で美術を学んだ後、七四年から渡仏。パリの国立美術学校で五年間を過ごし、いまもパリに住む。聞けばこれらの絵の下地作りだけに十を超える工程を要するというが、そんなことよりも何よりも、結果としての絵面(えづら)が説得力を持っている。「早川俊二展」は、六日まで、東京・神田錦町のアスクエア神田ギャラリーで。

## 徹底した凝視、生をも描写

「早川俊二展」

見ることの不思議、そして、そういう絵を作る画人の不思議をしみじみ思う仕事に出合った。画家、早川俊二の作品は、決して大きくはない。今回の個展には十六点を並べているが、四十号が最大で、大半が十号以下である。しかし、その画面から響いてくるものは、絵の大小を超えて、深々とした余韻を保ちながら力強い。不思議の秘密のひとつは、マチエールにある。何か、ルネサンス期のフレスコ画のような絵肌が分厚くつくられた上に、油彩が施されている。

女性を描いた人物画が六点。細やかなタッチの丹念な積み重ねが生んだ画面は、あやしい生気を潜ませている。確かなデッサン力に裏打ちされた造形である。ほかに、使い込んで少し錆（さ）びのきた油差しや工具が描いてある。古ぼけてはいるが人の手に長くなじんで働いてきたものの質感までが、徹底した凝視の果ての描写でとらえられている。あとはカリンやリンゴなどのくだもの、茶わんと貝を描いた静物……。

画廊の入口のところに「すずめ」という作品が掛かっていた。一羽のスズメが大地に立っている。『抜け雀』という噺（はなし）を思い出した。五代目の古今亭志ん生が得意にしていた噺で、浪々の画家が家賃のカタについて描いたスズメが、画面を抜け出して出たり入ったりするという、いかにも落語らしい設定だった。

たわいがないといえばそれまでだが、江戸の人たちは、「生き写し」の、神妙の出来の絵をそう言い表したのだ。早川のスズメも、なにかそんな予感をはらんでいるように思う。ひとつの命をみつめ、筆端にそれを語らせる力があるということである。

1950年生まれのこの画家は、東京で美術を学んだ後、74年から渡仏。パリの国立美術学校で5年間を過ごし、いまもパリに住む。聞けばこれらの絵の下地作りだけに十を超える工程を要するというが、そんなことよりも何よりも、結果としての絵面（えづら）が説得力を持っている。「早川俊二展」は、六日まで、東京・神田錦町のアスクエア神田ギャラリーで。

（編集委員 竹田博志）

日本経済新聞 1999年（平成11年）2月5日（金曜日）掲載